

ITL NEWS

No.60

立命館大学における研究への接続の取り組み

まえがき

立命館大学 教育開発推進機構 中島 英博

学部生の研究能力育成はどうあるべきか？

卒業研究等に代表される学生による研究は、学士課程のカリキュラムにおいて中心的な柱の1つと言えます。これは日本の大学の特徴の1つと言えるでしょう。学士課程段階での卒業研究や卒業論文は、学生が研究に取り組み、その過程を研究室やゼミ等の小集団で進める中で、専門的な知識や理解を深めるだけでなく、人間的な成長を遂げる場として伝統的に重視されてきました。

近年の教育政策では、産業界が求めるコンピテンシーの育成や、それと親和性が高いとされるアクティブラーニング等の教育技法が過度に注目され、研究指導の重要性がやや見落とされがちでした。しかし、実際の卒業研究指導の現場では、高次の能力を統合する教育・学習が行われ、コンピテンシーの育成にもつながる優れた指導が行われており、現代的なニーズにも合致する教育であることを再確認すべきと言えます。

一方、大学進学率が高まる中で、学生が大学に求める教育が多様化し、学士課程段階の研究の指導が難しくなる傾向もあります。たとえば、ベネッセ教育総合研究所が2021年に公表した「第4回大学生の学習・生活実態調査報告書」によれば、「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい」と考える学生は2割程であり、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい」と考える学生が多数を占めています。また、「単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい」と考える学生は一貫して減少し、「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい」と考える学生が増えている傾向もあります。

立命館大学は次世代研究大学を目指すビジョンを掲げており、地球市民を育成するという理念を実現するために、教育課程の中でも研究を重視し、質の高い研究指導に努めてきました。また、入学者の背景の多様化を受け、各学部は初年次から研究技法を学ぶための科目を配置し、最終年次に至るまで学生の研究力を段階的に高めるカリキュラムを整備してきました。本フォーラムではその取り組みを振り返り、これまでの成果と今後の課題を議論するために、2名の登壇者に話題提供を依頼しました。高田秀志先生（情報理工学部）には、3年次の「超領域リベラルアーツ」科目において、専門の枠にとらわれない問いを立てる科目の実際を紹介いただき、安田裕子先生（総合心理学部）には、初年次の研究への導入科目である「基礎演習Ⅰ」の設計と指導の実際を紹介いただきました。本フォーラムの議論は、立命館大学の学部での研究指導の今後を描く上で、広く関係者の参考になるものと思います。

超領域リベラルアーツ（教養科目）について

立命館大学情報理工学部 高田 秀志

「超領域リベラルアーツ」は、2020年度教養教育改革に伴い導入された高回生（3回生以上）向けの教養科目である。本科目は、専門分野の異なる複数の教員と学生が、よりよい未来を拓くために人類が取り組むべき課題を探究することを通して、未来社会のモデル構築、クリティカルシンキング、生涯に渡り学び続ける姿勢などの能力を身につけることを目的としている。特徴として、様々な分野からゲスト講師を招くこと、すべての回をライブ配信型メディア授業とすることによってキャンパスや学部の垣根を超えて受講生が集うことが挙げられる。

本科目の開講に当たり、テーマを「異分野融合によるアクティブライフ社会の創出」に設定した。これは、筆者がプログラマネージャを務めている研究科横断の「超創人財育成プログラム」におけるアクティブライフ社会の実現、および筆者がグループリーダーとして推進している立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）における研究プログラム「プレジジョンヘルスケアの社会浸透を推進するための総合知活用型研究拠点形成」の取り組みを学部教育に展開しようという試みである。双方とも、異分野の教員、研究者、学生が連携することによって新しい産業や価値観、社会システムを創出しようというものであり、本科目の趣旨とも合致している。

本科目の内容としては、研究に対するアプローチの仕方を著者自身の考えを交えて示した後、4名のゲスト講師の講演とグループディスカッションを行いつつ、グループによる発表を組み入れた。研究に対するアプローチの仕方としては、AI（人工知能）が普及しつつある現代において人間に求められる能力は「創造的思考力」であることを述べた後、「問いを立てる」「問いに答えるための手段を考える」「考えた手段を実行する」「実行した結果に基づいて問いに答える」という研究のプロセスを示すとともに、このプロセスでは「4つのP（Projects, Passion, Peers, Play）」（Resnick, 2017）の実践が重要とされていることを紹介した。ゲスト講師は、前述のR-GIRO研究プログラムに参画しているスポーツ健康科学部、総合心理学部、食マネジメント学部のメンバーに依頼し、また、筆者自身が情報理工分野の講演を行った。グループ発表については、発表テーマが「アクティブライフ社会実現のために取り組むべき課題」であることを説明した上で、中間発表（10分/グループ）と最終発表（20分/グループ）を設定した。なお、受講登録者数は37名であり、各グループが様々な学部の学生によって構成されるように考慮した上で、グループ当たり4名あるいは5名で全8グループを構成した。

最終発表のテーマとしては、高齢者や障害者を対象としてスマホアプリや社会システムを構築するもの、心理的な要素を盛り込んで運動への動機づけを高めようとするもの、日常生活の中で食事や運動の改善を促すものなど、「アクティブライフ社会」という言葉の意味を各グループで吟味した上で、それを深掘りするものとなった。また、テーマの探究に当たっては、それぞれの学部で身につけた専門知識が基礎として活用されていた。さらに、最終レポートとして課した授業の振り返りの内容としては、異なる分野の学生が混じって議論することの難しさや重要性に気が付いたという意見が多く見られた。これらのことから、異分野融合による課題の探究という本科目の目的はある程度達成されたと思われる。

一方で、オンラインでのグループディスカッションやプレゼンテーションでは身体性の欠如による没入感の不足があり、受講生は達成感が十分に味わえなかったのではないかと感じている。複数キャンパスを合同で実

施することの利益と、対面することの利益のどちらを取るかというのは難しい問題であるが、例えば、プレゼンテーションのみ授業時間外の土曜日に1キャンパスに集まって実施するなどの方策が考えられる。また、ゲスト講師による講演や受講生のプレゼンテーションでの質疑応答は活発に行われたとは言えず、発言するのは特定の学生や筆者自身に偏ってしまったという現状がある。双方向のコミュニケーションを活性化させるための担当教員の力量も含めて、このようなタイプの授業を有効に実施するための方策が必要である。

Resnick, Mitchel. Lifelong kindergarten: Cultivating creativity through projects, passion, peers, and play, Cambridge, Massachusetts, The MIT Press, 2017.

総合心理学部の「基礎演習Ⅰ」について 立命館大学 総合心理学部 安田 裕子

総合心理学部では「基礎演習Ⅰ」を、学びの移行支援をはじめ、キャリア形成を取り入れつつ、3年後に取り組む卒業研究を見据え、研究の入門的・基礎的な内容を学ぶよう組み立てている。PBL (Project Based Learning) 型授業として、グループによる協働的な学びの形態により実施している。

到達目標は、①研究の型を理解し研究をまとめることができる、②目的の設定をはじめとした研究の手続きを理解し研究を進めていくことができる、③グループメンバーで協働して、立案・計画し探究した内容を発信することができる、である。メンバーの多様な関心事の共有とそこからの問題発見、問題解決のための研究目的および仮説やリサーチ・クエスチョンの設定、研究方法の選択、調査や実験などによるデータの収集、データの分析、結果のまとめ・解釈、結果に基づき問題や研究目的に即した考察、研究成果の発表、まで行う。フェーズ1「大学での学びに移行する」(1～3回目)、フェーズ2「読む・調べる」(4～6回目)、フェーズ3「収集する・分析する・表現する」(7～9回目)、フェーズ4「結果をまとめる・学びを統合する」(10～14回目)、フェーズ5「発表する・リフレクションする」(15回目)という流れにより段階的に学修する。「広い意味での研究的マインド」と「研究遂行のための一連のアクションの型」を身につけることが目指される。

その特徴には、①授業運営のクラス間共有、②仲間づくり・協働性の醸成、③キャリア形成支援、④「研究参加クレジット制度」の適用、⑤『総合心理学部 学びのガイドブック』の活用、⑥中間報告会・ポスター発表大会、があげられる。順に説明する。①1クラス30名弱、10名の教員がクラス担任になる。教員用テキストを活用し授業運営内容を統一して、メーリングリストで情報や疑問・解決の共有をはかりながら行う。②クラス機能を備え、授業に続く1コマをサブゼミ活動に位置づけ、オリター団の支援を得ながら、5月に実施される「いばらき×立命館 DAY」での出店やOICの宿泊施設・セミナーハウスでの合宿などを実施している(新型コロナウイルス禍では見合わせ)。また、初めの3回分を高校から大学への学びの移行支援にあて、2回目には『未来を拓く』を活用しつつ、大学という場での関係づくりを支援する。③総合心理学部では各学期の9週目をキャリアウィークと題し、その一環として4年間「学びのセルフアセスメント」を年度内2回(計8回)行うよう設計しているが、その初回を「基礎演習Ⅰ」の9回目に行う。「学びのセルフアセスメント」は、これまでの取り組み、見つけた大切にしたいこと、これから取り組みたいこと・試してみたいこと、について自ら問いかけ、今後の生活と勉強をより楽しく豊かなものにするよう言葉に記す活動である。また、13～14回目にはこの記載内容をクラス担任が読んだうえで短い個人面談を行う。④「研究参加クレジット制度」は、1・2回生を対象に、心理学の実証的研究や多様な研究活動への参加を通して、学生の思考力や自主的で自律的な学修態度を養うことを目的とする。その意義は、研究の「生みの苦しみ」を知ったり、研究活動そのものや研究者と接することができることである。「基礎演習Ⅰ」では、活動に参加しクレジットを獲得することが単位取得に必須となる。⑤12回目には中間報告会を、15回目にはポスター発表大会を開催する。とりわけ後者は学年全体で開催し、賑やかな雰囲気の中で躍動感や達成感を得られる場となる。⑥4年間を通じて参照する『総合心理学部 学びのガイドブック』を活用するべく、授業内容や予習・復習に組み込んでいる。『総合心理学部 学びのガイドブック』は、「総合心理学部での学び」「研究をはじめよう」「グループで学習しよう」「アカデミック・スキルを身につけよう」「評価に向き合おう」「社会と未来を拓く」による6章と3つの付録(総合心理学部キーワード、文献について理解しよう、論文・レポートの書き方)により構成される。

こうした複数の学びのしかけを含む「基礎演習Ⅰ」は、同学期開講科目「リテラシー入門」との連携がはかられ、また、秋学期の「基礎演習Ⅱ」への接続が意図されている。総合心理学部での学修は11ユニットおよび教養科目の学びと6つの履修モデルによって行われるが、4年間の学修の集大成である卒業研究に段階的に取り組む「演習・卒業研究ユニット」における基盤となる力を「基礎演習Ⅰ」で修得することが目指されている。



立命館大学教育開発推進機構 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL : 075-465-8304 FAX : 075-465-8318 email : fd1cer@st.ritsumeikan.ac.jp <http://www.ritsumeikan.ac.jp/itl/>

発行日 : 2023 年 5 月 編集・発行 : 立命館大学 教育開発推進機構